

不況と戦争の時代（1931～1945）その2

《1930年、帝都復興祭、そして煙突男事件》

1930年（昭和5）は、関東大震災から7年が経過し、3月に、復興を祝って「帝都復興祭」が挙行され、天皇が下町を視察されました。11月には、世界恐慌下、労働者解雇を巡って労働争議が多発しており（注1）、その象徴的ともいえる煙突男事件が発生します。

富士瓦斯紡績川崎工場（跡地が川崎競馬場）では、1930年6月の解雇通知を契機に、会社と労働組合の争議に発展。長期に及んだ11月16日、川崎工場の煙突に青年が登り、頂上の足場に陣取って、小旗を振って争議解決を呼びかけます。新聞は、これを煙突男として取り上げ、六郷橋は、見学者で溢れかえったそうです。

21日は、昭和天皇が、広島から東海道線を使って東京に戻られる日に当り、また川崎大師の縁日で多くの人々が参詣に訪れます。こうした背景もあって、21日、川崎警察署長が労使調停に入り、労働者に有利な形で合意されました。これを聞いた煙突男は、午後3時、自ら煙突を降りました。

なお、このとき、同時進行していた労働争議が、東京の亀戸で起こった東洋モスリン争議です。こちらは1930年（昭和5）9月26日から11月19日にかけての争議でした。従業員約2500人（うち女性が約2000人）は、大量解雇反対を掲げストライキに突入、地域ぐるみの大闘争が繰り広げられたのですが、こちらの方は、従業員側が敗北しています。

こうした世相ではあっても、科学技術のイノベーションはとどまることなく、前年8月には、飛行艇ツェッペリン号が霞ヶ浦に寄航し、また翌年8月には、リンドバーグが飛行機で太平洋を横断して根室に到着しています。これに負けじと、日本も飛行機の世界記録樹立に立ち上がりました。それは次回にご紹介。

注1：前年には、多摩川流域周辺では、横浜ドッグ（現みなとみらい21にあった三井造船所の前身）争議や、東京市電のゼネストがありました。

写真は、①帝都復興祭清洲橋御通過の御召自動車（東京都立図書館HP掲載写真より）、②富士紡績の位置と煙突男の遠景（今昔マップを背景に、富士紡績の位置と当時の新に掲載された写真を使い、細見作成）

①



②

